

使徒言行録講2 6章1-32節

『真実で理にかなったこと』

パウロは今、ユダヤ人の王、アグリッパの前に立っています。その妹のベルニケ、総督フェストゥス、千人隊長、カイサリアの町の主だった人々、お歴々の前に立っています。パウロは二年もの間の監禁を経て、総督が代わったことで、あらためて裁判が行われ、ユダヤ人の王アグリッパの求めに応じて、多くの人の前で、弁明の機会を与えられたのです。

26章のパウロの弁明・演説はとてもよく整ったものです。大きく四つのことをパウロはここで語ります。一つは自分のこれまでの経歴です。二つは、ユダヤ人との折衝（やりとり）です。三つはパウロ自身の回心とその後の活動。そして四つ目はパウロの伝道の内容です。裁判とはまた違う場で、パウロはこれまで以上にたくさんのことを語ります。今朝は四つのうちのうちの一つ、パウロ自身の回心とその後の活動を語った部分を中心に聞いて、演説の全体にも心を寄せつつ、主のみ心に聞いてまいりたいと思います。

パウロは自分の経歴を語る中で、彼がユダヤ教の伝統の中で育ち、ファリサイ派という最も律法に対して厳密なグループの一員として歩んできたこと、そして、そのなかで、自分が神のお与えくださった約束の実現を望んでいる、ということ語ります。神の約束の実現というのは、十字架で死んだイエス・キリストが神によって復活させられたように、わたしたち一人一人も、最終的には、神によって復活させられ、永遠の命に与るという希望です。この希望のゆえに自分はユダヤ人から訴えられている、とパウロはいうのです。ユダヤ人たちはそれがこの裁判の争点だとは思っていなかったかもしれません。だが実のところ、それが最大の争点だ、とパウロは言うのです。そして事実、自分も以前はこんなことを宣べ伝えるキリスト教徒を迫害してきた側の人間だった。

その自分がキリスト教徒を迫害していた時、「王よ、わたしは天からの光を見たのです。」その光は太陽よりも明るく輝き、わたしと同行者の周りを照らした。そこでわたしは語りかける声を聞いた。「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか。棘のついた棒をけると、ひどい目に遭う」それは一つのことわざで、無駄だよ、という意味の言葉でした。わたしを迫害しても無駄だ、と語りかける声はいう。パウロが回心を語ること自体が二度目ですし、その前に著者ルカの手によって回心の記録が書かれています。つまりわたしたちはこれ同じこと

を三度も、繰り返し聞いた、ということになるのです。その繰り返しには深い意味があるのではないか。

パウロは、ユダヤ教徒として、いろいろ考えあぐねていたり、悩んだりしていたわけではありませんでした。律法学者としてファリサイ派の一員として、充実した日々を送っていた。だからパウロがイエス・キリストを求めていたわけではない。天からの光が射してきた、自分に向かって呼びかける声を聞いた、それらは皆、パウロからではなく、向うからの働きかけでした。回心の話で繰り返されるのは、そのことです。

わたしが自分で探して見出すのではなく、キリストが探して見出してください。迷子になった一匹の羊探し続けるのは羊飼いで、羊が羊飼いを探したのではないのです。これがとても大事なことです。パウロはダマスコに向かっていくとき、迫害すべきキリスト教徒を探していました。そのパウロが全く思いもよらず、探されていたのです。そしてキリストによって見出される。声をかけられていくのです。

「そのときわたしはキリストの愛がわかったのです。だから、わたしはその時キリストを受け入れたのです。」「わたしが求めていたものはこれだ、という獲得の喜びがあったのです。」というような話では全くない。というか回心というのは、わたしの中の何か満足して起こることではないのです。

パウロ回心の話が使徒言行録では繰り返される。もちろんそれは、その都度必然性があることです。しかし、わたしたち読者からすれば、繰り返し読む、ということになるのです。何度も読む、その中でこそ、次第にはっきりしてくることがあるはずです。

ひとつにはわたしたちが回心するのは、わたしの側からではなく、パウロの側からでなく、神の側からわたしに近づいてきてくださっておこることだ、という今申し上げたこと。わたしの側からではない、ということはわたしの求めや、わたしの考えによらない、ということです。わたしの求めや考えなどどうでもいい、ということではありません。しかしそれが主導権を握っているのではない、ということです。そのことはもう少し踏み込んで言うと、回心において、わたしたちの求めや考えを充足させたり、満足させることになるとは、まったく限らない、ということです。むしろわたしたち望む充足や満足とは全く違う形で回心は起こりうるし起こる。

回心の出来事は、わたしの自己実現の道ではない、ということです。つまり、わたしの願いに応じて、生まれるものでもないからです。わたしの願いがあり、

それが成就したり、実現するということと、回心という出来事は違うことです。

しかも繰り返されるパウロの回心の出来事を読み続けると、回心は自己目的で生きた人間が、神から与えられる目的へと生き方を変えられていくものだということがわかるのです。神から呼びかけられ、神の方に向き直って、それで終わり、というようなものではない。神からの呼びかけがわたしの中に入ってきて、生きる目的が緩やかにであれ、急にであれ、変えられていく、その全体が回心なのです。

パウロは、神が語りかけるのを聞いた。「起き上がれ、自分の足で立て。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そして、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者（仕え手）、また証人にするためである。

自分のためにパウロは生きてきた。信仰も極論すれば、自分のため。自分の救いのために、信仰してきた。だれだって大なり小なりそうです。ところがパウロは、神に呼びかけられ、神に仕えて、神の働き手となる、そういう転換を経験していく。それは、この間ずっと申し上げている、義とされる、キリストの中に移される、キリストの恵みの中に移された、ということと深く呼応しています。キリストの中で生きる、そこで人は生きる目的が変えられていくのです。

それは、アブラハムも、イサクも、ヤコブ、皆回心を経験し、生きる目的が変えられていくのです。その際、パウロはユダヤ人にも、異邦人にも、目を開いて、闇から光へ、サタンの支配から神に立ち帰られ、罪の赦しを受け、先ほど言った約束の実現、一人一人が復活して完全に救われる時共に待ち望む、そのために奉仕しなさい、と言われたのです。

先日、ある先輩の牧師と話をしていたら、気づくと「繰り返し読む」という話になっていきました。つい何週間か前、わたしも説教の中で「繰り返し聞く」という話をしたところだったので、関心を寄せて話に聞き入っていました。

するとその方は、教会で、例えばマルコ福音書の連続講解説教した。そしてあまり間を置かずに、もう一度マルコ福音書の連続講解説教した、というのです。もちろんそれは、前の説教をまたするというようなことではなく、もう一度読み直し、もう一度新たな説教を作り、語ったというのです。繰り返し読む、ということを経験する人々共に経験するため、とその人は言われた。実はわたしも以前から考えていたことだっただけに、その話にはとても共感しました。

パウロの演説が終わった時、フェストゥスは「パウロ、お前は頭がおかしい。

学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」と言いました。それがパウロが自分はキリストの復活を信じ、終わりの時の一人一人のよみがえりを語り告げる、と言ったことを受けての発言でしょう。キリストの福音、教会の語る福音はわたしたちの常識では、頭がおかしい、狂気だ、と言われるようなものです。つまりわたしたちの理解や知性では受け止められないものです。救い主が呪いの形である十字架にかかって死ぬこともあり得ないことなら、死んで葬られた人間が復活するなどということも、ありえないこと、あり得ないというよりも狂気としか言えない。フェストゥスはおそらく人々の思いを代弁しているのです。確かにそうかもしれない。

とすれば、わたしたちは人間の理解や知性を超えたものの語りかけとか呼びかけに出会うかどうか、ということが決定に大事だということにあります。人間の理解ではおかしい、狂気だ、というものであったとしても、パウロは呼びかけに聞いたのです。近づいてくださったキリストの言葉に聞いたのです。そこから歩み始めてきたのです。その呼びかけは人間を超えた方の呼びかけです。だから当然わたしの中にある常識や理解を根本から揺さぶります。呼びかける声があることも、呼びかける声に導かれて歩むことも、わたしの常識は押しとどめようとします。わたしたちの知性は、それに抗おうとします。しかし、その声はわたしに呼びかけているのだ、ということの前に立って、この声に導かれて歩いていくことが回心です。人間からすれば、それがどんなおかしい言葉であっても、そこに信実で理にかなった言葉があることを信じて歩いていく、その全体が回心です。だから回心というのは一度きりの経験なのではなく、その呼びかける声に、くりかえし聞く、そういう経験なのです。パウロは自分の回心の経験をそれは自分一個の個人的な体験だと思っていたのと同時に、これは神のなさる働きなのだから、形はいろいろであるにせよ、ほかの人にとっても回心は、根本同質の経験だと思っていた。そしてそれは人に語るのと同時に、自分に向かって繰り返し語る経験だったのではないか。パウロは自分の回心の経験を自分に向かって繰り返し語り、呼びかける神の声から歩き始める自分の人生を、そのたびごとに確認していたのではないか、と思うのです。